

越境する「日本人」の日本認知

——日本の国際社会における位相認知構造——

首都大学東京 前田悟志

1 目的

外国（人）との接触・交流の経験は世界と日本の認知にどのような影響をどのようなプロセスで与えるのかを考察することが主目的である。重要な先行研究である田辺俊介(2008)の調査では対外接触交流の経験が明らかに好感度認知に影響を及ぼしているという示唆が得られた。しかし、好感度を聞いているその調査では、対外交流経験の尺度は渡航経験や外国人友人の有無であり、どの国でのどのような内容の経験なのか、またどの国の人とのどのような内容の友人関係なのかの細分化はされていない。諸外国を一律には認知していないことが知られている「日本人」の実情を考慮すると、適切に対外接触・交流経験の影響を反映できておらず、量的調査ゆえの制限があることは否めない。

「『日本人』が世界をどのように思い描いているのか」という問い（田辺 2008）は自ずと日本と諸国との相対的な認知的位相を描写することだ。さらに対外接触交流の経験が一定の説明力を持つことが示されている以上、冒頭で挙げた本研究の問いはその当然の具体化である。

2 方法

接触・交流経験の濃淡を独立変数とする聞き取り調査を行った。量的調査ではすくい取りにくい次の人々を対象にした。帰国子女も含んだ対外接触・交流経験の比較的高い「日本人」である。聞き取り内容は、①外国（人）との交流経験に焦点を絞った簡易なライフストーリーと各交流段階での経験内容、②現在の生活環境、関わりを持った国と日本の各社会に対する態度、日本と世界の諸国の布置の認知、そして③番目に①と②の内容を対象者自身はどのように結びつけて捉えているのかである。

3 結果

対外的な接触交流の経験はいくつかの媒介する要素を経て、日本社会、そして関わりをもった国の社会への態度が（再）構築されている。当事者の各社会への態度は、日本の国際社会における相対的な序列認知に影響を与えていそうだ。今回、言及する価値がある媒介要素は次の二点である。

ひとつは〈時代性〉。日本の国際的な立ち位置はこれまでも時代によって変化してきたが、昨今の国際的な勢力シフトを受け、日本人が諸外国の人と接する際の扱われ方が再び変化している可能性が指摘できる。

もう一点は〈生活環境の統制傾向〉。パーソナルネットワークの選好を含めた周囲環境（重要な他者の選択、職業倫理の系統にもとづく職場選択、友人選択など）の整備傾向が高まることだ。類似の世界観を共有維持可能な日常世界を統合的にしていると同時に、日本と世界の認知図式の共有の確認作業が、その図式そのものにリアリティを付与しているようだった。

4 結論

以上から、外国（人）との接触・交流経験は以下の2つの要素を媒介し「日本人」の日本と世界の諸国の相対的な認知的位相形成に影響を与えていた。（1）時代性による日本の国際的立ち位置によって交流経験の内容に再び変化が認められる。（2）接触・交流経験は濃度の高い程に周囲環境の諸価値が齟齬を起こさないように整備する傾向があり、その環境が日本と世界への態度を強化していた。

文献

田辺, 2008, 「『日本人』の外国好感度とその構造の実証的検討—亜細亜主義・東西冷戦・グローバルイゼーション」『社会学評論』234: 369-387.